

柳川 寛治

官僚らしからぬ親分肌で、開けっ広げな性格、斗酒辞せすのタフネスぶり。文部官僚から参院議員に転じた柳川寛治は、昭和後期から平成初期において、教育行政に大きな足跡を残した人物だった。柳川は大正15（一九二六）年神奈川県に生まれた。陸軍士官学校に進むも、間もなく日本は終戦を迎える。

柳川は陸士同期で後に衆院議員となる加藤六月、近岡理一郎と3人で「これからどうするか」と夜を徹して語り合ったという。

柳川は早稲田大学から文部省に入る。アイディアマンで鳴らし、「子供は風の子太陽の子」をキャッチフレーズに全国の児童の遊び場、施設の充実に汗を流した。

体育局長や管理局長を務めた後、元文部大臣・内藤登三郎の後継者として、昭和58（一九八三）年に参院比例代表で初当選を果たす。以来、通算3回の当選を重ねた。

官界出身議員は大勢いるが、当時、文部省OBは柳川だけで、「弱者、汝の名は文部省」って言うんだよ」とつぶやくのを、筆者も何度か聞いてくる。

私学教育振興のために

柳川が就いたのは沖繩開発政務次官で、文部省時代、沖繩返還によって米国施政下からの教育制度切り替えに奔走しただけに、特別な思い入れをもって職務に取り組んだ。

他方、柳川が初当選した年の暮れ、加藤六月は自民党税調会長となった。来年度予算編成時、狙上に載った中には私立大学の助成削減があった。柳川は加藤を料理屋に招き、「日本の私学教育振興のためにご理解いただきたい」と迫った。

後年、加藤は、この時の会話について「柳川君の心情を充分理解し、力強く無言の握手で返事をした」と語っている。

その頃、「盲腸」と揶揄された政務次官に就任した際、柳川は「盲腸というのはうずいた時に存在がわかる。大臣、事務次官のラインがうまくいかなくなった時、国会対策上の根回し、党との橋渡しをやるのが政務次官の役目だ」と語っている。

3回目の選挙は惜敗を喫するも、5年半後の平成13（二〇〇二）年に繰り上げ当選となる。任期満了まで5カ月しかない。「柳さん、最後の奉公を国会議員としてしようよ」と国政復帰を促す加藤に、柳川は「頑張るよ」と応じた。終戦直後に将来を語り合ってから、すでに56年の歳月が流れていた。政界引退後間もなくの平成16（二〇〇四）年、柳川は急逝心不全で、この世を去る。78年の生涯だった。



読売巨人軍の川上哲治元監督と、少年野球教室の開催で合意する柳川寛治（左）

多士詳伝

第83回 | 政治学者 小枝 義人